

# 平安朝漢文学における自序の系譜

——文人の自己形成——

宋 哈

はじめに

本稿においては紀長谷雄の「延喜以後詩序」〔『本朝文粹』卷八、201〕、大江匡房の「暮年記」〔『本朝統文粹』〕を考察の対象とする。

先行研究の概要を述べるならば、後藤昭雄氏の「文人相軽」<sup>〔1〕</sup>以来、「延喜以後詩序」は菅家門下の有力者たる紀長谷雄の自叙伝とみなされ、詩人無用論を考察する周辺資料として捉えられている。ついで「暮年記」<sup>〔2〕</sup>であるが、後藤氏が「大江匡房の『暮年詩記』」について「<sup>〔2〕</sup>で指摘したように、その文学史的意義は大江匡房の『本朝文粹』受容の一環として、長谷雄の序をモデルとした点が注目される。

『兩篇』に関しては多くの論考が備わるが、『兩篇』が自伝的作

品と見なされながらも、その表現の文学的特質について考察されることは稀である。本稿は自伝的作品として『兩篇』を吟味し、平安朝における文人の自己形成の作品として読みうることを考察する。

## 一、自序の叙述——集団から独立する個人

「延喜以後詩序」は書序の部に収められている。従って序の分析に入る前に、個人の文集の書序について少しく概観したい。

まず、序という文体の定義を確認しよう。早くに孔安国は『尚書』序に「序は以て作者の意を序する所なり」と述べている。明の徐師曾は『文体明弁序説』において、「序は、緒なり」という『爾雅』の説に基づき、「其の善く事理次第

を叙ぶ、序の有ること絲の緒の若くを言うなり<sup>①</sup>と解する。いわば序は現代の我々が想定するような、書物の趣旨を述べる文体として認識されている。

つぎに古代中国における自序の特徴については、川合康三氏が「書物全体の内容、執筆の動機などを記すものであるが、執筆の経緯を記すなかで時に著者自身の経歴に触れることがある」と概括している。つまり、書序に共通する要素として第一に書物の趣旨、第二に著者の略歴が想定される。平安朝の書序である「延喜以後詩序」、源順の「沙門敬公集序」（『本朝文粹』巻八、202）も基本的な要素を備えていると見てよいだろう。

それでは「延喜以後詩序」の分析に遷る。当該詩序は、紀長谷雄の最晩年にあたる延喜年間に成立し、一五歳の大学寮入学に始まり、延喜年間に至るまでの人生を回顧するとともに、延喜年間に製作された詩を収録した『延喜以後詩卷』の編纂経緯・動機を記したものである。冒頭部から文章生に補されるまでの箇所を掲げる。

- ① 予十有五始志<sup>レ</sup>学、十八頗知<sup>レ</sup>属文<sup>一</sup>。  
② 時無<sup>レ</sup>援助<sup>一</sup>、未<sup>レ</sup>遇<sup>レ</sup>提獎<sup>一</sup>。先師都大夫、為<sup>レ</sup>当时秀才<sup>一</sup>。予雖<sup>レ</sup>列<sup>レ</sup>門徒<sup>一</sup>、未<sup>レ</sup>及<sup>レ</sup>知名。于<sup>レ</sup>時、北堂諸生群飲、同賦<sup>下</sup>「幽人釣<sup>レ</sup>春水<sup>一</sup>」之詩<sup>上</sup>。先師独擢<sup>レ</sup>予詩<sup>一</sup>曰、

「綴韻之間、甚得<sup>レ</sup>風骨<sup>一</sup>。」依<sup>レ</sup>此一言<sup>一</sup>、漸增<sup>レ</sup>声價<sup>一</sup>。其後信<sup>レ</sup>譜、遂被<sup>レ</sup>疎遠<sup>一</sup>。淪翳積<sup>レ</sup>年、研精永倦。貞觀之末、纔登<sup>レ</sup>進士之科<sup>一</sup>。

紀長谷雄の自序は『論語』為政篇のあの有名な言葉、「子曰く、吾十有五にして学を志す」をふまえて説き起こされる。長谷雄は後年こそ文章道の第一人者として重きをなした。文人としては稀有の中納言の位にまで至ったが、若年は起家の文人として官界に身を投じねばならなかった。後藤昭雄氏は「属文」（文を属る）を長谷雄が一八歳にして初めて詩を賦したと解するが、柿村注・新大系注で当該箇所が付された『漢書』「賈誼伝」の一節である「賈誼は雒陽人なり。年十八にして、能く詩書を誦し文を属るを以て郡中に称せらるる」は、若年にして能文であった賈誼の資質を示すものであり、他の史伝にも類似する表現がまみられる。従って一八歳の頃には能文であったと解するのが穏当かと思われる。

しかし、その後の青年時代は史伝にしばしば見られる能文家達のそれ——例えば賈誼は文名を以て郷里に知られ、時の太守・呉公の知遇を契機として景帝に召される——と比べて多事多難であった。②にあるように、起家の文人であるために援助を得られなかった長谷雄はやがて都良香の

門人となり、詩が良香の目にとまってその才を認められ、名を徐々に知られるようになったものの、それを嫉視した同門によると思しい讒言によって冷遇される。苦境に立たされた長谷雄はそれでも貞観一八年（八七六）、三二歳にして文章生に補される。「研精」は細かく調べることに。細心の注意を払って学問に没頭する様を表す言葉として史伝で用いられており、例えば『後漢書』「曹褒伝」で「昼夜研精し、沈吟して専思す」と表現している。長谷雄は必死に勉強することによってしか自らの運命をきり拓けなかった。そのような長谷雄の境涯は道真門下に入ることで開けたようである。道真ら師友との交流を描く箇所を掲げる。

③ 故菅丞相在「儒官」之日、復党「同門」、未「有」相許「  
適見」予「大極殿始成宴集詩」云、「不「意」伊人詞藻至「  
此」。自後属「意、数相寄和……

④ 故伊州別駕田大夫作「当代之詩匠」。昔為「美州別駕」、  
秩滿帰洛、見「予」旧草、「即語」人曰、「吾始不「許」紀秀才  
文」。自「我不」見四五年來、体製非「昔、可」謂「日新」。  
寛平年中、田大夫臥「病遂亡」。

③に記されたように菅家の門下に入った当初は目立たず、『大極殿始成宴集』に収録された詩が「適ま」道真の目にとまって才能を認められ、しばしば唱和するようにな

った。④では当代の詩匠と称される島田忠臣が美濃介の任期終了後に長谷雄の詩を目にし、刮目してその詩才を讃えたという。前掲した大学寮時代に關する記述においても、やはり都良香の評価によって詩名が増したと長谷雄は述べている。つまり、長谷雄の詩才の具体的な質は、有力者が認めるといふ話型によって表現される。かかる発想自体は書序にまみ見られるものの、長谷雄の場合、その過程は波乱に満ちたものであった。都良香門下で冷遇をうけただけでなく、前掲箇所①傍線部に「復た同門に党せしかども、未だ相許すこと有らず」とあるように、新しく属した菅家においても詩が「適ま」見出され評価されることを待たねばならなかった。長谷雄の上昇の軌跡は単線的なものではなく、一回は失敗し（都良香）、二回は成功する（菅原道真・島田忠臣）という、螺旋的にくりかえされる人間関係の型のうちに、無名の文人が苦闘しながら詩名を獲ちとる過程が克明に描かれている。

そして道真・忠臣から実力を認められた長谷雄は、今度は同輩（高丘五常）と対等に交友関係を結び、やがては上位者として後輩（小野美材）を讃える立場にまわる。しかし、詩友達は相次いで没し、師の道真も昌泰四年（九〇二）に太宰府へと左遷されてしまう。道真らをとりまく詩人無用

論については先学の論考が備わるので深く立ち入らないが、道真は長谷雄に贈った「傷野大夫」(『文粹』巻一、016)において、詩を言わぬ儒者がはびこる今、詩人たる長谷雄も劇務に忙殺され詩を詠む暇もないだろうと嘆きつつ、まもなく世を去ったと長谷雄は語る。朝廷は詩に重きを置かぬ儒者に占められることとなった。

在<sub>レ</sub>朝儒者、寔繁有<sub>レ</sub>徒、咸列<sub>三</sub>王何之輩<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>習<sub>三</sub>潘謝之流<sub>一</sub>。取捨不<sub>レ</sub>同、是非各異。彼豈為<sub>三</sub>愛憎<sub>一</sub>而然乎、誠不<sub>レ</sub>知<sub>三</sub>文體之趣<sub>一</sub>也。司馬遷有<sub>レ</sub>言、「誰為<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>之、誰令<sub>レ</sub>聽<sub>レ</sub>之」。故予延喜以後、不<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>詩……

儒者は碩学の王弼・何晏を学び、大詩人の潘岳・謝靈運の如く詩をたしなまない。彼らは長谷雄ら詩人と異なる嗜好を有し、それは特定の文体を好むというのではなく、文體の趣をまったく理解しないためであると長谷雄は痛烈に批判した。また司馬遷の「報任少卿書」(『文選』卷四一)の一節を引用し、知己をすべて失った延喜以降、もはや詩を語ることを厭うようになったと長谷雄は蕭索たる思いを吐露する。

起家の文人が学閥を渡り歩く過程で詩名を獲得し、詩友と深い交情を結ぶものの、やがては友人をすべて失い、垂暮に独り歎息する——以上を要すれば、過去への限りない

懐旧の念と、現在の孤独が自序の基調である。だが、当時の詩道が危機的状况にあったかは、その後の平安朝漢文学の発展を知る後世の我々にとってみれば、甚だ不透明と言わざるを得ない。後藤氏が指摘したように、客観的に評価するならば長谷雄が喪失したのは「詩人的小世界」であるが、見方をかえれば、詩道の衰退と誇張されるほどに長谷雄の抱え込む孤独は深かったのである。

つまりこの自序は、ある種の物語的虚構を孕みつつ自己形成を織りなしたものと評価しうる。冒頭において類型的没個性的に造型された無名の青年が、官界での紆余曲折を経、詩名を獲得し、幸福なる時間を詩友と共有するもの、それを失い、時の学儒に傑出する真の詩人となる成長譚として、自序は構築されているのである。時間の推移に律されて紡がれる幸福の獲得と喪失、そして集団からの乖離という叙述によって、長谷雄の個が鮮明に打ち立てられたと言えよう。かかる物語的虚構によって支えられた自己形成と文学性は、平安朝中期の漢文学においては決して一般的なものではなかった。

そもそも、詩集に自序を冠するという営為自体が、当時においてはさほど一般的とは言えなかった。川合康三氏が「衆多と異なる我れ——書物の序に見える自伝」で取り上

げた司馬遷の「太史公自序」(『史記』)、王充の「自紀篇」(『論衡』)、曹丕(そうひ)の「自叙」(『典論』)などは歴史書・思想書といった、一貫した意図によって体系的に纏められた書物に付された自序である。それに対して、人生の折々に異なる動機・背景によって作られた詩は、時間の断片を無原理的にとらえるものであるが、詩篇が集積整理された詩集に自序が冠されるのは稀である。六朝から唐までの佳篇を収録する『文苑英華』の序部には、下位項目として「詩集」が設けられており、この期間中に詩集の序がジャンルの一つとして拡大定着したことをうかがわせる(『文選』は詩集の序を取らない)。しかし、『文苑英華』に収録された二八篇の詩集序中、自序は白居易の「因継集重序」(巻七二三)および居易と親交のあった李紳の「追昔遊集序」(巻七二四)のみであり、選集の序あるいは個人の詩集に知人友人の寄せたものが大勢を占めている。また、『全唐文』に検出範囲を拡大してみても、詩集の自序は許渾の「烏絲闌詩自序」(巻七六〇)をふくめ数篇しか見出されない。つまり詩集の自序は相対的にそれほど高く評価されるものではなく、また文人達の自己表現の具として定着していなかった。

だがそのような環境にあつて、白居易が前述の「因継集重序」を含め、二篇の詩集序を残しているのが注目される。

ここではもう一篇の自序である「序洛詩」(『文集』巻六一、<sup>293)</sup>を取り上げたい。「序洛詩」は白居易の晩年にあたる大和三年(八二九)から八年の間に洛陽で詠じた詩四三二首をまとめた詩集に付したものである。これらの詩の内容を白居易は以下のように概略する。

序<sup>一</sup>洛詩<sup>一</sup>、樂天自叙<sup>二</sup>在<sup>レ</sup>洛之樂<sup>一</sup>也……除<sup>二</sup>喪<sup>一</sup>朋哭<sup>レ</sup>子十數篇<sup>一</sup>外、其他皆寄<sup>二</sup>懷於酒<sup>一</sup>、或取<sup>二</sup>意於琴<sup>一</sup>。

冒頭で、洛陽における喜びを自ら述べるのが序の目的であると標榜した白居易は、友人儿女の逝去を悲しむ十数首を除けば、基本的に泰らかな閑適生活の諸相をうたつたものであるという。大和年間、牛李の党争と宦官の跳梁により唐朝廷は混迷を極め、白居易は中央政界から距離を取りつつ洛陽で半ば隱遁生活を送っていた。この頃の白居易は、親友元稹・子息の逝去を悲しみ、また盟友の牛僧儒の宰相辞任に衝撃を受け、政局を深く憂慮する時そのままあつたようである。しかし先に見たように、白居易はこの時代をあくまで多幸であつたとし、その喜びを二点に分けて分析的に語る。

A 予不佞、喜<sup>レ</sup>文嗜<sup>レ</sup>詩、自<sup>レ</sup>幼及<sup>レ</sup>老、著<sup>レ</sup>詩數千首……以<sup>二</sup>其多<sup>一</sup>矣、作<sup>二</sup>一數奇命薄之士<sup>一</sup>亦有<sup>レ</sup>余矣。今寿過<sup>二</sup>耳順<sup>一</sup>、幸無<sup>二</sup>病苦<sup>一</sup>、官至<sup>三</sup>三品<sup>一</sup>、免<sup>レ</sup>罹<sup>二</sup>飢寒<sup>一</sup>、此一

楽也。

B 閑適有<sub>レ</sub>余、酣樂不<sub>レ</sub>暇。苦詞無<sub>二</sub>一字<sub>一</sub>、憂嘆無<sub>二</sub>一声<sub>一</sub>、豈牽強所<sub>二</sub>能致<sub>一</sub>耶。蓋亦發<sub>レ</sub>中而形<sub>レ</sub>外耳。斯樂也、実本<sub>二</sub>之於省分知足<sub>一</sub>、濟之以<sub>二</sub>家給身間<sub>一</sub>、文之以<sub>二</sub>觴詠弦歌<sub>一</sub>、飾之以<sub>二</sub>山水風月<sub>一</sub>此而不<sub>レ</sub>適、何往而適哉。茲又以重<sub>二</sub>吾樂<sub>一</sub>也。

A で白居易は幼少時より詩を作ることを好み、総計数千首になったと過去をふりかえる。分量の多さから古人のごとき不遇薄命の文人になりうるもの、今、六十を越えて病苦なく、しかも高位に昇り、生活に困らない事が喜びの一つであるという。

B では洛陽生活の閑適詩が、「毛詩大序」に標榜される詩の原義にそった自然な心情の流露であること。そしてそれが知足の精神と十分な収入、管弦詩歌、山水風月によって実現されているのだと白居易は言い、これを快とし、喜びが二重になったとする。

自分の本性に適合した閑適生活の諸相。川合氏は、洛陽時代に執筆された自伝的作品の「酔吟先生伝」(『文集』巻六一、<sup>2942</sup>)を、陶淵明の「五柳先生伝」に強く影響を受けつつも、白居易に独自の「饒舌」によって多幸なる自分が語られていると評している。当該詩序もかかる多弁的なス

タイトルを有していよう。洛陽時代の詩を精読してゆけば、この五年間はそれ以前の人生と同じく悲喜哀歎にみちみちており、必ずしも閑適を謳歌する時代ではなかった。だが居易は、得意の饒舌さで、これまで無秩序に流れ去った時間間に統一的な意味を付与しようとする。そこには現在の自分に繋がる過去を完全な閑適の時として鑄直し、記念づける切実な思いがあったと想像されるが、「草堂記」(『文集』巻二六、<sup>1470</sup>)「酒功贊」(同巻六一、<sup>2927</sup>)など、詩を含めた様々な文体で幸福なる生活の諸相を分析的具象的にうたいあげた姿勢と一致するものであろう。そのような優れて中唐的な居易の自意識と創作姿勢のありようが、詩集の自序を例外的に成立せしめたものではなかったか。当該序が『文苑英華』の「詩集」ではなく、意外にも詩宴の序を集めた「詩序」に配されていることが、分類の枠組みに収まりきらないその性格をよく示している。

さて、中国における個人詩集の自序がかくのごとき位置にあったのであれば、平安中期までにおけるそれらもまた同様であつたらう。あえて自序を著した紀長谷雄の独自の見識と衷情が推察されるが、道真が「草堂記」に触発されて個人的現実に強く根ざした「書齋記」(『菅家文章』巻七)を記したように、紀長谷雄もまた、「序洛詩」を前にして過去

から現在に至るまでに形成された自分という存在を、独特に叙述する可能性を見出したのではないか。両者の自序が字句・構成の両面ではほとんど影響関係が認められないのは、むしろ長谷雄の受容が表層的な模倣の段階をつきぬけ、独自の自己形成を遂げたことを示唆していると考えたい。しかし序に刻み込まれた個性は、詩境の変容なくして完成されることはない。

## 二、独吟の価値

序の末尾<sup>10</sup>には、詩に対する認識を改めた長谷雄の心境が吐露される。

⑦ 故予延喜以後、不好言詩。風月徒抛、煙華如棄。雖関公宴、不敢深思。只避格律之責而已。

⑧ 若夫觀物感生、隨時思動、任志所之、不勞摘藻。独吟独作、不肯視人。年往月来、徒成卷軸。題曰「延喜以後詩卷」。後之見者、莫不叹到佳境耳。

⑦で詩を言う事を好まなくなった長谷雄は、詩興を催す風月煙華に背を向け、公宴に与つても格律を遵守するだけで詩句の表現に彫心鏤骨することはなくなったと言う。その代わりに、⑧において長谷雄は「毛詩大序」の「詩は志

の之く所也」をふまえつつ、景物時節に触れ、感興の生ずるままに独詠するようになり、もはや他者に見せない。「物を観て感生じ、時に随ひて思動くときは、志の之く所に任せ、藻を摘ぶるを勞せず」は「毛詩正義」の「物に感じて動く、乃ち呼びて志と為す」を源泉としていよう。公の場で、良辰美景に感じて文飾を凝らしてきた過去を長谷雄は断ち切ろうとする。

長谷雄の詩風の重心は技巧から主情へ、公宴から独吟への転換を明確に宣言したとは解せよう。だが今一度、序に言及された詩について吟味したい。菅原道真が「常に吟賞して以て口実と為」したという、紀長谷雄の「草樹暗逢春」(類従本「作文大体」)を掲げる。

- 1 春、生無跡漸從東 春の生ずること跡無きも漸く東よりす
- 2 草樹相迎暗至中 草樹相迎えて暗かに中に至る
- 3 向暖因縁唯媚景 暖に向かう因縁はただ媚景なるのみ
- 4 尋陽媒介是柔風 陽を訪ぬる媒介は是れ柔風
- 5 庭增気色晴沙緑 庭は気色を増して晴沙緑なり
- 6 林変容輝宿雪紅 林は容輝を變じて宿雪紅なり
- 7 芳艷不知何処契 芳艷は知らず何処に契りし
- 8 誰教計会一時通 誰か計会して一時に通わしめし

昌泰元年(八九八)正月二十日の内宴で賦された詩で、

当該自序で頸聯が道真に愛唱されたと言う。まず首聯に題目の「草樹暗逢春」が用いられていることから（傍点参照）、この詩が句題詩であることが了解される。本間洋一氏が明らかにしたように、この時期の句題詩的詩作は定型化の端緒をつかんだばかりであり、道真の句題詩でさえも、後世の句題詩の形式と少なからぬ隔たりがあったという。その中で長谷雄詩が後世の句題詩と同じ特徴、すなわち七言律詩による句題詩の制作、そして首聯で題字をすべて用いていることは特筆されるべきである。長谷雄詩の特徴はそれだけではない。頸聯に注目したい。庭は気色を増し、陽光に照らされた沙は緑となり、林は風采を変え、残雪は紅となると言う。いわば庭・林・晴沙・宿雪Ⅱ草樹、気色・容輝Ⅱ春という見立ての対応関係によって、題意を敷衍する「破題」的表現を試みている。また、『和漢朗詠集』に頸聯が摘句されていることから、紀長谷雄の公宴詩人としての評価の高さがいま見られよう。

この詩のみならず、自序で賞賛された詩（「幽人釣春水」菊散一叢金）はいずれも詩宴における句題詩である。長谷雄の詩才は、もっぱら参与者が一定の規則によって詩を作り、その技巧を競い合うジャンルにおいて認められていた。句題詩は詩人の内面があまり反映されない形式ではあるけれ

ども、その反面共通の条件のもと、技量を比較把握するのに最適であったことも事実である。『江談抄』の逸話群で詩人達が句題詩の表現をめぐる自論を戦わせているように、彼らは相互に技量を試す場に常時立たされていた。

しかし長谷雄は公宴詩に心を砕くことを放棄し、主情的な詩風に重点を置くという。それを長谷雄は「独吟独作、不肯視人」と表現する。「独吟」は白詩にしばしば見られるものであった。例えば元和二年（八〇七）、ちゆうちつ盤屋ちゆうちつ尉であった頃に作られた「官舎小亭閑望」（『文集』巻五、0187）は、官舎の小亭に独り臨み、質素ながらも気楽な生活を送る事を快とし、「亭上独吟罷め、眼前無事の時／数峰太白の雪、一卷陶潜の詩／人心各自らはとし、我が是とするは良に茲に在り」と言う。すなわち小亭での独吟を終えればあるいは雪を被る太白山の峰を眺め、あるいは手元の陶淵明の詩篇を見やり、人はそれぞれ是とするものがあり、自分にとつてはこの泰らかな生活こそが望ましいものと白居易は述べる。閑適生活の一部に「独吟」が組み込まれていることと、またそれが陶淵明と結びつけられているのが注目されるよう。独吟とは集団から独立して詩を楽しむ私性の象徴なのであった。長谷雄の自序における独吟の意味もほぼ同質だと考えられる。

技巧を凝らした公宴詩から直叙的な独吟独詠へ——実情は語られたように直截簡明なものではなかっただろう。彼がふりすてたという「風月」は、制作状況の公私にかかわらず、折々に詩情を触発される媒介となった自然の象徴として、道真が詩にくりかえし詠みこんだものであった。長谷雄の独吟を導き出す「物を観て感生じ、時に随ひて思動くときは、志の之く所に任せ、藻を摘ぶるを勞せず」も、風月煙華をふくめた風物時節を感じ取り、志を述べる事であった。彼が敢えて「風月」を公宴詩に結びつけたのは、独吟との対応関係を抽象化して際立たせるためである。すなわち、自在に詩人の内面を語ると抽象化された独吟は、公的秩序に律され、技量がつねに問われる公宴詩の対極に置かれたことで、その本質的価値が明示されているのである。

そして独吟こそは、かつて詩友と共有した文学的理念を記念する手立てなのであり、同時に自己形成の完結を示すものであった。彼の文学的理念の一端は貞真親王の文亭で開かれたとされる詩宴序の「対残菊待寒月詩序」(『文粹』巻一、331)に示されている。詩宴は、昌泰元年(八九八)九月十日の朱雀院後朝の宴で「秋思入寒松」の題で賦された親王の詩を道真らが讃嘆し、道真が発起人となって閏十

月十七日に開催されたという。私的な集まりであったことが了解されるが、一部抜粋する。

夫交無<sub>二</sub>貴賤<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>新旧<sub>一</sub>。志得則膠漆生<sub>三</sub>於一言<sub>一</sub>、道合則風雲感<sub>二</sub>於千里<sub>一</sub>……且述<sub>レ</sub>懷曰、「……從<sub>レ</sub>今而後、及<sub>二</sub>生之涯<sub>一</sub>、每<sub>レ</sub>至三月之夕、雪之朝、雜花生<sub>レ</sub>樹、危葉辭<sub>レ</sub>枝、觸<sub>レ</sub>物催<sub>レ</sub>感、乘<sub>レ</sub>興思<sub>レ</sub>人之時<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>期相尋、不<sub>レ</sub>契相会。雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>盃杓<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>管絃<sub>一</sub>、一詠一吟、遣<sub>二</sub>懷於筆硯之間<sub>一</sub>耳」。言約已成、交情亦定。聊記<sub>二</sub>本末<sub>一</sub>、以作<sub>二</sub>後日之張本<sub>一</sub>也。云<sub>レ</sub>爾。

そもそも、交わりに貴賤新旧の違いはなく、志を得れば一言に膠漆の如き厚情を生じ、道と同じくすれば遠く風雲千里を隔ていても互いに感ずる事が出来ると長谷雄は言い、そして心中の懐いを吐露する。四季の折々に物に触れて感を催し、友を思う時に至れば、期せずして相集い、美酒管弦がなくとも一詠一吟して唱和し、筆と硯に思いを走らせよう。今日の詩宴に盟約を定めた顛末を記し、後日の証としよう、と。

長谷雄の文学的理念は上記につくされているが、なかでも傍線箇所注目したい。期日を定める事、入念に酒・管絃等を用意し当日催す事は、同時期の他の詩序、そして大小の宴を記録する古記録・儀式書に必ず言及される、宴の

必要不可欠な要素である。すなわち、長谷雄は儀礼的基本的要素をとりはらい、筆と硯の間に構築された醇乎たる私的詩文の世界に相携えて逍遙せんと呼びかけている。そこには理念を共有する友情の篤さをも看取しえよう。道真・忠臣らとの交情は無論、「延喜以後詩序」に高岳五常との交情を記す時も、長谷雄はやはり限りない懐かしさをこめて「交わりを筆硯の間に定め」たと回想している。

そしてもう一点注目したいのは、長谷雄等の文学的理念が発せられるに至る過程である。すなわち、朱雀院にて催された後朝宴の親王の句題詩↓それに共鳴した道真が詩友を集め、文亭で詩宴を開催↓序者を務める長谷雄の文学観の闡明と言うように、それは公的文華にて力量を認め合った詩人たちがその枠外に小世界の領域を見出し、それがやがて自律してゆくのに連動してせりあがっている。当該詩序成立の外的要因として目を追うごとに勢いを増す詩人無用論があったと思しいが、それに直面して道真ら詩人派の一体感はなおのこと高まっていたことだろう。それだけに、存分に唱和する友をことごとく失った時、友情を記念する意図とともに、私性を担保するものとして、自分自身を拠り所とする独吟の価値が強烈に意識されたのである。もはや公的秩序も詩人的小世界も必要としない。ここに長谷雄

の自己形成は完結を見るのである。

流れさった至福の時を記念しようとする誠実な姿勢。孤独とともにせりあがる個性。まことに遺憾ながら『紀家集』の大部分が失われてしまったために、長谷雄と詩友の交情のありようは詳らかにしえない。しかし、豊かな過去を回顧し、自己を見つめなおす過程に示された衷情によって、長谷雄の自序は『本朝文粹』に採られるほどの文学性を獲得し、書序の規範の一部たりえたのである。

### 三、「暮年記」——成功者の孤独——

「延喜以後詩序」がこれまで述べてきたような表現の特徴を有するのであれば、それを「暮年記」のモデルとした大江匡房の意図もおおよそは理解しえよう。佐藤道生氏によるならば「暮年記」は匡房が大宰権帥として大宰府に在任していた康和年間（一〇九九—一〇三）の初めに執筆された蓋然性が高い<sup>(1)</sup>と言う。本稿では佐藤説に従い、六〇歳前後に執筆されたものとして考察を進める。

「暮年記」の概要を述べれば、大江匡房の幼少期から回顧され、成長してゆく過程で周囲の公卿・文人と交流を深めるものの、寛治年間（一〇八七—一〇九五）以後、友人をすべて失ったために、孤独を抱えながら独吟にうちこむ、

というものである。当該記と「延喜以後詩序」の影響関係は後藤氏の論<sup>(14)</sup>に言い尽くされているが、なお問題が氏によって提示されている。それは実質的に詩友全員の逝去が康和年間なものにも関わらず、匡房があえて虚構化してまで「寛治」と記した事に注目し、それが匡房にとってどのような意味を持つものであったのか、である。まずはこの疑問に自分なりの解答を示したい。結論から先に言えば、寛治年間<sup>(15)</sup>は業績の面で紀長谷雄にとつての延喜年間と対応するものである。

第一に元号である。寛治は匡房がはじめて勘申に成功した元号である。匡房は計五回の元号勘申に成功しているが、その濫觴が寛治であったのであり、思い入れのあったことは想像に難くない。それに対して、延喜は紀長谷雄が勘申したものであった。匡房の曾祖父である匡衡は、自身の勘申した長保・寛弘の年間が泰平であった事を喜び、「長保寛弘年間、天下幸甚。老儒不堪傾感。聊述所懷」(類従本「江吏部集」巻二)を詠じたが、その自注に「謹んで旧事に檢す。延喜の年号は、紀中納言の献ずる所なり。其の子の淑光は、頻りに顕要を歴て卿相に列す。天曆の年号は、江中納言の献ずる所なり。其の子の齊光は、頻りに顕要を歴て卿相に列す。長保寛弘の政、江家斯<sup>(16)</sup>に因りて馮居<sup>(17)</sup>せし所多し」

とある。元号勘申が文人にとり無上の榮譽であったことがうかがわれよう。

第二に官位であるが、寛治八年(一〇九四)六月一三日に匡房は権中納言に昇進する。大江氏にとつては維時以来の快挙であると同時に、くしくも紀長谷雄は延喜一〇年(九一〇)に権中納言に補任されている。長谷雄以降、起家・累代を問わず文章道出身者が中納言に昇ったのは匡房を含め維時・藤原忠輔のわずか三人ばかりである。長谷雄が文人社会で大きな存在であったことは、寛治八年八月八日の積奠で権中納言匡房が上卿として参会した時、同席していた藤原宗忠が延喜年間に紀長谷雄が上卿として積奠に座した先例を想起して「今、已<sup>(18)</sup>に旧跡に叶うか」(「中右記」同日条)と、感慨深く記していることから看取できよう。やはり傍目からすれば、紀長谷雄は栄光に包まれた人物であった。だが前述したように、異例の出世を遂げてなお彼の心は意外なほどに空虚であったのである。

このように寛治年間は紀長谷雄にとつての延喜年間と対応する。「延喜以後詩序」を当該記が襲っている以上、記念すべき元号・官位の一致を匡房が意図した可能性は十分考えられよう。それは同時に、長谷雄に比して顕著な匡房の個性、すなわち名利へのあくなき執着心の一端を示すも

のである。それは記全篇を貫いている。一部抜粋する。

①予四歳始読書。八歳通史漢。十一賦詩。世謂之神童。

②源大相国風月之主、社稷之臣也。試賜雪裏看松貞之題。此日、時棟朝臣在座。筆不停滯、文不加点。相府深賞歎之、幸賜汲引之恩。

③宇治前大相国、又為被賦詩、忝有微辟。雖予參不賦之。依当相府之忌月也十二月。此日相子曰、「履地踰人、必至大位」。

④十六作「秋日閑居賦」。故大学頭明衡朝臣、深以許焉。常曰、「期鋒森然、定少敵者」。後作「落葉埋泉石詩」、感曰、「已到佳境」。予後日見之、未盡其美。然而感先達名儒如此。

⑤故文章博士定義朝臣、謂予師右大弁定親朝臣曰、「定義始不許江茂才文、近日製作可謂日新」。

⑥故都督源亞相久好鑽仰、兼知文章。見予文章、必加褒美。馬嘶吳坂之風、龜持廬江之浪。予昇進之間、必加吹噓之力。

⑦前肥前守時綱朝臣深得詩心。見予「前大相国表」并「源右相府室家源二位願文」曰、「殆近江吏部文章」。冒頭①では幼少期が回顧されている。四歳で読書始めを

し、八歳で『史記』『漢書』に通じ、一一歳で詩を賦した。周囲は彼を神童と呼んだと言う。一一歳は永承六年（一一〇五）にあたる。

②の源大相国は源師房。風月の主と呼ばれているように、詩文に優れていたという。師房は「雪裏看松貞」の題で匡房に詩を作らせてその才を試した。匡房詩の出来映えは手を加える必要がないもので、その才学を認めた師房は匡房を推挽したという。汲引は推薦すること。木本好信氏によれば、大江匡房の『江家次第』は師房の学を継承したものであり、師房は詩文だけでなく様々な面で匡房を導いた存在であったようである。また当日は匡房の大叔父にあたる大江時棟が同席していた。

③の宇治前相国は藤原頼通。匡房は作文会に呼ばれたが、藤原道長の忌月を知っていたために詩を作らなかつた。頼通はこの敏い少年の相を見て、将来は高位に至るであろうと予言したと言う。

④では匡房の作った「秋日閑居賦」と「落葉埋泉石詩」が藤原明衡に称賛されたこと、⑤では菅原定義に力量を認められたことを回想する。『中右記部類紙背漢詩集』に徴すれば、長元七年（一一三四）五月一五日に頼通邸で行われた法華三〇講の作文会をはじめとして、明衡と定義は詩

宴で頻繁に同席しており、ともに文壇に重きをなしていたようである。匡房は先達に嘱望されていた。

⑥の都督は源経信。和漢に優れていた文化人であったが、匡房の昇進に与って力があつたと述べられている。経信は匡房と公私問わず交流していたようで、経信の『帥記』には匡房がしばしば言及され、例えば永保元年（一〇八一）一月二日には叙位除目について匡房に諮問した事が記されている。また年代は不明であるが、経信の長楽寺参詣に匡房が従つて無題詩を賦している（『中右記部類紙背漢詩集』巻九）。そして、前述した寛治の勘申成功には経信が深く関与していた。最終候補として匡房の寛治と藤原敦宗の治和が残つたとき、経信は藤原通俊とともに寛治を推し、結果寛治が選ばれたという（『為房卿記』応徳四年四月一日条）。交情の証としても寛治は特別な意味があつたろう。

⑦の前肥前守は源時綱。時綱は匡房の文を見て祖父の匡衡の文章を彷彿させると評価した。藤原為隆の『永昌記』天永二年（一一一一）十一月五日条によれば、惟宗孝言が匡房に維時と匡衡の優劣を聞くと、匡房は維時を目標としていると答えたという。しかし⑦に鑑みれば、匡衡の文章を匡房が尊敬し、継承すべき祖として重視していた事がうかがわれる。また、言及された「前大相国表」は頼通の六

男・師実のために代作した「辞関白第三表」（『統文粹』巻四）等を指し、「源右相府室家源二位願文」（同巻二三）は師房の次男・顕房の室隆子のために作ったものである。つまりここで匡房は、源師房・藤原頼通に将来を寿がれるだけでなく、その後継者達、すなわち両家から代々信頼されてきたことを示唆している。事実、匡房と師房の長男・俊房は親密であつたし、また木本好信氏が明らかにしたように師実の長男・師通とも関係が深かつた。『後二条関白記』に徴すれば、師通が頻繁に匡房を自邸に招いて漢籍の講釈を受けた事が確認される。

さて、引用箇所以外でも惟宗孝言・大江佐国等から詩文が評価された逸話を書き連ねてゆくのであるが、やはり強調せねばならないのは、端々に顔をのぞかせる名利への強烈な意識であろう。村上源氏・藤原撰関家、そして新旧の文人から将来を嘱望され、称賛・信頼されていたと匡房は過去を造型している。

かかる叙述は己の才能を強く自負していた事を示すものであり、自負心は他の資料からも看取できる。例えば『江談抄』第五巻の「都督自讃事」は、七〇に近い垂暮の匡房が語つたものであるが、「つらつら物情を案ずるに、官爵と云ひ、福祿と云ひ、皆文道の徳をもつて経たるところなり。

何ぞ況んや才芸名譽の殆ど中古の人に過ぐるをや」とあり、わが才能と業績は往古の大儒すら凌ぐと、自己陶醉気味に述べていた。このように累代の文人として青雲の途を足取り軽やかに進んだ寛治以前ではあったが、「爰に頃年以來、此の如き人、皆以て物故す。文を識る人、一人の存するものなし」と記したように、やがて詩友はみな遠行し、匡房の幸福の時は失われる。匡房は解消しえない孤独に陥ってゆき、長谷雄と同じ独吟の境地にたどりつくのである。

だが、「暮年記」は虚構が巧妙に交えられた作品であったことを今一度、強調しておきたい。匡房が語るほどに過去は順風満帆ではなかった。康平三年（一〇六〇）に従五位下式部少丞に叙任されてから治暦三年（一〇六七）に東宮学士に任ぜられるまで匡房の官位は停滞していた。『今鏡』「すべらぎの上」には「中納言匡房まだ下臈に侍りけるに、世を恨みて、『山のなかに入りて世にもまじらじ』など申し」<sup>20</sup>）たとある。けだし出家を口にするほどに彼の不遇感は深刻なものがあつたらう。無論その不遇感は治暦年間以降の躍進によって癒されたのであるが、ここで注目するべきは、白居易の「序洛詩」のように過去を再構成する意図が明瞭に看取できることである。つまり当該記には、周囲の庇護のもと万事順調であつた全き幸福な過去と、深刻な

孤独に浸る現在が仮構・対比されている。それは匡房が認識した自己の人生の軌跡であつたのである。

後藤昭雄氏は「暮年記」を評して「称賛の声のみに満たされていた匡房の文学交渉圏の崩壊はその切実さが伝わってこないのも致しかたのないことであろう」と述べる。まさしく氏の指摘するように、文人社会が地殻変動のただなかにあつた十世紀末に、道真という巨星と運命の一部を共有した者の、大きな感情の振幅が託された「延喜以後詩序」に比して、匡房の記はどうしても淡泊さの憾みを免れまい。しかし本稿では匡房が過去を捉えなおすのに、事実を曲げてまで「延喜以後詩序」をモデルとしたその姿勢を重視したい。

そもそも当該記に限らず、匡房には人生を回顧し、分析的に意味を引き出す意識が極めて強いように思われる。彼の処世訓を述べた「続座左銘」（「続文粹」巻二）を一部抜粋しよう。

1 貧賤敢勿屈、富貴敢勿奢 貧賤に敢へて屈する勿れ、富貴に敢へて奢る勿れ  
2 聴喜勿持躍、聴憂勿傷嗟 喜を聴きて持躍する勿れ、憂を聴きて傷嗟する勿れ  
3 忠信以奉国、仁愛以顧家 忠信を以て国に奉げ、仁愛を以て家を顧みる

……  
6 運譬北叟馬、迷任南司車 運は北叟の馬に譬ふ、迷は南司の車に任す  
……

10 三思而後行、二世殆庶耶 三たび思ひてしかる後に行へば、二世は殆ど庶<sup>ちか</sup>からん耶

貧賤に屈せず、富貴に奢らず。一喜一憂せず。忠心を國に報い、仁愛を家に注ぐ。運命は塞翁が馬のごとく、惑えば指南の車に行き先を任せるべきだ。よくよく熟慮して行動すれば、今生も来世もひとしく安泰であるう。

激動する院政期を巧みに遊泳し、異例の出世を遂げた匡房の慎重にして調和の取れた処世をよく伝えるものであるけれども、銘の序に「後漢の崔子玉は『座右銘』を作る。大唐の白楽天は之に続く。本朝の元謙光は『座右銘』を作る。今、江満昌は亦た之に続く」とあり、崔瑗<sup>さいえん</sup>以来の系譜を承けるものであることが明記されている。また序に言及された銘はいずれも慎重な処世を語る。すなわち、先人の思考の形跡をなぞり、内面化して人生の意義を思索すること、匡房は鋭敏な感覚を有していた。それは、愛息隆兼の死を直接の契機として執筆された<sup>23</sup>とされる「弁運命論」〔統文粹〕卷一一に、運命の不条理に対する思索が、徹頭

徹尾典故によつて織りなされている点に一斑がうかがえよう。

つまり「暮年記」は、紀長谷雄の生涯をおのが人生にひきつけ、歩みなおそうとする営為であり、それ自体に匡房の心情が示されていると思うのである。『古今著聞集』卷三によれば、太宰権帥の任期終了後の帰路で、不当に得た財物と正当で得たものとを二艘に分けて進ませたところ、「道理の船」がしずみ、「非道の船」が無事であったのを目にして「世は早く末になりたり。人いたく正直なるまじきなり<sup>23</sup>」と、保身や実利を道理に優先させることを是認している。このような説話が生まれる程に匡房は「倒るる所に土を掴」む受領らしい貪欲苛烈な一面を持っていた。大曾根章介が指摘したように美作守の秩滿後、功過に税帳など上申しなかつたことを源経信に尋問された際にも、後日ものを知らない<sup>24</sup>と経信を嘲笑し、実はその間、藤原通俊と共謀して白河帝に受領交替の制度改正をひそかに要請する<sup>25</sup>など（類従本『参議要抄』「除目」）、狡猾で政術に老練な様をのぞかせている。だが、他方で彼は亡き姉や亡児隆兼に願文を奉げ、感傷的な内面を物語る作品も多く残している。関白師通の逝去に際し、「あさゆふにこふるなみだをとりかへしはちすのうへのつゆとなさばや」（江帥集<sup>25</sup>）という哀

傷歌を詠じているが、撰闋家との関係も全くの打算ばかりではなかつたようである。

匡房は自己顕示欲が強く、また名利に執着していたけれども、功名に狂奔する虚しさを「忙校不如閑序」(『続文粹』卷八)で「有限の命を以て、無極の榮を求む。愚魯の質を以て、金紫の位を望む。天の祐たすけず、人の嘸ふくまずは、職もとより之に由るか」とも述べる。けだし名利の儂さを己に強く言い聞かせなければならぬほどに、匡房の業は深いものがあった。であるならば、中納言という文人として数百年來の大出世、そして文学交渉圏が完全に消失した時、自己形成に深く関わった人々の恩義を想起したのではないか。そこに、自身とは全く対照的な個性を表現した紀長谷雄の自序に共感する素地があったのである。強いて長谷雄の型にひきよせて懐旧の念を表出したために、虚構化の痕跡や感情の過剰演出が目につくものの、晩年の寂寞のただなかにあつて過去を想起していたのであつてみれば、やはり彼なりの感傷が込められていたと考えられる。

以上、人生の軌跡を散文に再構築してゆく試みが、極めて平安文人社会的な文脈に依りつつ、平安中期以降展開されてきたことを粗描した。「暮年詩序」がなぜ「暮年記」として受容されたのか、また両序が平安漢文においていか

なる位置にあるのか、論ずべき点はなお多くあるが、他考を期したい。

#### 【注】

- (1) 後藤昭雄「文人相軽」『平安朝漢文学論考』(補訂版 勉誠出版、二〇〇五年/初出一九七三年)
- (2) 後藤昭雄「大江匡房の『暮年詩記』について」同前掲書(初出一九七九年)
- (3) 特に注記のない限り本稿で引用する中国の資料の本文は中華書局本による。
- (4) 本文は羅根沢・于北山校訂『文章弁体序説・文体明弁序説』(人民文学社出版、一九五九年)に従い、訓みくだしは私に施した。
- (5) 川合康三「衆多と異なる我れ——書物の序に見える自伝」『中国の自伝文学』(創文社、一九九六年)
- (6) 本文、訓みくだし、作品番号は大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『本朝文粹』(新日本古典文学大系二七 岩波書店、一九九二年)に従った。特別な注記の無い限り本稿における『本朝文粹』引用は同書による。
- (7) 後藤昭雄「紀長谷雄『延喜以後詩序』私注」『平安朝文人志』(吉川弘文館、一九九三年/初出一九七五・一九七六年)

- (8) 本稿における『白氏文集』の本文、訓みくだしは新釈漢文大系に従った。括弧内に花房作品番号を示す。
- (9) 川合康三「かくありたい我れ——『五柳先生伝』型自伝」同注55所掲川合書
- (10) 引用箇所は寥榮発氏の発表「紀長谷雄の「詩言志」の宣言——「延喜以後詩序」を読み直す——」(第二二八回和漢比較文学会例会(東部)、二〇一五年七月二五日)に従って校訂した。
- (11) 訓みくだしは注7所掲後藤昭雄「紀長谷雄『延喜以後詩序』私注」に従った。
- (12) 本間洋一「句題詩考」『王朝漢文学表現論考』(和泉書院、二〇〇二年)
- (13) 佐藤道生「『暮年記』の執筆時期」『平安後期日本漢文学の研究』(笠間書院、二〇〇三年)
- (14) 注2所掲後藤昭雄「大江匡房の『暮年詩記』について」
- (15) 本文は大日本古記録による。
- (16) 本文は国史大系本による。
- (17) 木本好信「藤原師通と大江匡房」『平安朝官人と記録の研究——日記逸文にあらわれたる平安公卿の世界——』(おうふう、二〇〇〇年)
- (18) 前注所掲木本好信「藤原師通と大江匡房」
- (19) 本文、訓みくだしは後藤昭雄校注『江談抄』(新日本古典文学大系三二 岩波書店、一九九七年)に従った。
- (20) 本文は河北騰『今鏡全注釈』(笠間書院、二〇一三年)によった。なお、若年の匡房の不遇感については本間洋一「大江匡房の漢詩」同注12所掲本間書を参照されたい。
- (21) 注2所掲後藤昭雄「大江匡房の『暮年詩記』について」
- (22) 山田尚子「大江匡房『弁運命論』の表現とその思想」『中国故事受容論考——古代中世日本における継承と展開』(勉誠出版、二〇〇九年)
- (23) 本文は岩波古典文学大系による。
- (24) 大曾根章介「晩年の大江匡房——「老儒の生活と文学」『大曾根章介——日本漢文学論集』第二卷(汲古書院、一九九八年/初出一九七七年)。大曾根氏は晩年の匡房が寂しい心境にあった事を丹念に析出している。
- (25) 本文は新編国歌大観による。